

父杉山茂丸を語る

夢野久作

青空文庫

白ッポイ着物に青い博多織の帯を前下りに締めて紋付の羽織を着て、素足に駒下駄こまげたを穿いた父の姿が何よりも先に眼に浮かぶ。その父は頭の毛をクシヤクシヤにして、黒い関羽鬚かんうひげを渦巻かせていた。

筆者は幼少から病弱で、記憶力が強かったらしい。満二歳の時に見た博多駅の開通式の光景を故老に話し、その夜が満月であったと断言して、人を驚かした事がある位だから……。

だからそうした父の印象も筆者の二歳か三歳頃の印象と考えるといいらしい。父が二十七八歳で筆者の生地福岡市住吉すみよしに住んでいた頃である。この事を母に話したら、その通りに間違いないが、

帯の色が青かったかどうかは、お前ほどハッキリ記憶していない、お祖父様じいの帯が青かったからその思い違いではないかと云った。

その父が三匹の馬の絵を描いた小さな傘を買って来てくれた。

すると間もなく雨が降り出したので、その傘をさしてお庭に出ると云ったら、母が風邪を引くと云って無理に止めた。筆者は、その「風邪」なるものの意味がわからないので大いに泣いて駄々を捏ねたらしく、間もなく許可ゆるされて跣足はだしで庭に降りると、雨垂れ落おちの水を足で泄たえたり臺ひきを蹴飛ばしたりして大いに喜んだ。時々翳かげしている傘の絵を見て、馬の走って行く方向にクルクル廻わしているところへ、浴衣がけの父がノツソリ縁側に出て来て、傘の

上から問うた。

「それは何の絵けエ」

弾力のある柔和な声であつた。

奥の八畳の座敷中央に火鉢と座布団があつて、その上にお祖父様が座つておられた。大変に憤おこつた怖い顔をして右手に、総鉄張り、梅の花の銀象眼ぞうがんの煙管きせるを持つておられた。その前に父が両手を突いて、お祖父様のお説教を聞いているのを、私はお庭の植込みの中からソーツと覗のぞいていた。

その中うち、突然にお祖父様の右手が揚あがつたと思うと、煙管が父のモジャモジャした頭の中央に打突ぶつかつてケシ飛んだ。それが眼

にも止まらない早さだったのでビックリして見ている中に、父のモ ज्याモ ज्या頭の中から真赤な滴りがポタリポタリと糸を引いて畳の上に落ちて流れ拡がり初めた。しかし父は両手を突いたままジツとして動かなかった。

お祖父様は、座布団の上から手を伸ばして、くの字型に曲った鉄張り銀象眼の煙管を取上げ、父の眼の前に投げ出された。

「真直ぐめて来い（モツト折檻してやるから真直にして来いという意味）」

と激しい声で大喝された。

父は恭しく一礼して煙管を拾って立上った。その血だらけの青い顔が、悠々と座敷を出て行くところで、私の記憶は断絶してい

る。多分泣き出したのであろう。

それが何事であつたかは、むろんわからなかつたし、後^{のち}になつて父に聞いてみる氣も起らなかつた。

父は十六の年に、お祖父様を説伏^{ときふ}せて家督を相続した。その時は父は次のような事をお祖父様に説いたという。

「日本の開国は明らかに立遅れであります。東洋の君子国とか、日本武士道とかいう鎖国時代のネンネコ歌を歌つていい心持になつていたら日本は勿論、支那、朝鮮は今後百年を出^いでずして白人の奴隸と化し去るでしょう。白人の武器とする科学文明、白人の外交信条とする無良心の功利道德が作る惨^{さん}烈^{れつ}なる生存競争、血

も涙も無い優勝劣敗掴み取りのタダ中に現在の日本が飛込むのは
孩子^{あかご}が猛獸^{おどろ}の檻^{おり}の中にヨチヨチと歩み入るようなものであります。
この日本を救い、この東洋を白禍^{はつか}の惨毒から救い出すためには、
渺^{びよう}たる杉山家の一軒ぐらい潰すのは当然の代償と覚悟しなければ
なりません。私は天下のためにこの家を潰すつもりですから、御
両親もそのおつもりで、この家が潰れるのを楽しみに、花鳥風月
を友として、生きられる限り御機嫌よく生きてお出でなさい」

その時はまだ私が生まれていない前だったから、果してこの通
りの事を云ったかどうか保証の限りでないが、その後の父^{のち}は正し
く前述の通りの覚悟で東奔西走していたし、お祖父様やお祖母^{ばあ}様
も、母までも、その覚悟で、あらん限りの貧乏と闘いつつ留守居

していた事を、私は明らかに回想する事が出来る。なつかしい、恨めしい、恐ろしい、ありがたい父であつた。

父は或る時、お祖父様に舶来の洋傘こうもりのお土産を持って来て差上げた。それは銀の柄の処のボタンを押すとバネ仕掛でパツと拡がるようになっていたので欲しくてたまらず、コツソリ持出して廊下でボタンを押してみたが、どうしても開かないので、失望して、又ソツト、モトの押入れに入れた。何だか恐ろしかったので、逃げるように表へ出た。

又或る時、やはりお祖父様に、鼈甲縁べっこうぶちの折おり畳たたみ眼鏡ぐあいを持って来て差上げた。これも、その折畳まり工合が面白くて不思議な

ので欲しくてたまらず、そつと持出して引っぱってみる中に壊れてしまったらしい。お祖母様に大変に叱られた。

又或る時、父は自分が東京から冠かぶつて来た臘虎らつこの頭巾帽子ずきんをお祖父様に差上げた。お祖父様は大層お喜びになって、御自分でお冠りになり、それから私に冠せてアハハハと大きな声でお笑いになった。

私は眼の前が真暗になった上に、臘虎の皮特有の妙な臭気がしたので直ぐに脱いで投棄てたように思う。

その時に父はコンナ話を、お祖父様にした……と後のちになって私に話した。

「あの帽子は東京で一番高価たかいゼイタクなものだったので、大得

意で故郷に錦を飾るつもりで冠つて来たものです。染得たり西湖にしき柳色の衣いというところですよ。然るにだんだんと故郷に近づくに連れてあの帽子が気になりました。在郷の同志が、身動きもならぬ程貧乏し、落魄らくはくしている顔付きを思い出すに連れて、十円もする帽子を大得意で帰って来る自分の心理状態が恥かしくて、たまらなくなりましたから、汽車が博多駅に着く前に折畳んで懐ふところに入れて、知人に会わぬようにコソコソと只今帰って参りました。途中でこの帽子をドウ仕末しようかと考えましたが、結局アナタ（お祖父様）に差上るよりほかに道がないと気が付きました。アナタに差上るのならばドンナに身分不相応なものでも恥かしくな
いことが、わかると同時に、日本の国体のありがたさがイヨイヨ

ハッキリと心に映じました。人間はエラクなると増長したくなるものです。榮耀えいよう榮華えいがをしたくなるものです。しかも、それが威張れば威張るほどツマラヌ奴に見えて来るし、榮耀をすればする程、自分の恥を晒さらすことになるものですが、不思議なことに、ドンナに身分不相応な事でも、天子様と、神様と、親様の御おん為ためにする事なら、決して恥かしくないことがわかりました。日本人たる者は、天子様と、神様と、親様のためと、この三つに限って、無限のゼイタクを許されている訳です。私はこの十円の帽子のお蔭で、大きな悟りを開く事が出来ました。その記念と思ってドウゾこの帽子を冠かぶって下さい」

お祖父様は、その後のち、前記の洋傘こうもりと、鼈甲縁の折畳眼鏡と、

ラツコの帽子を大自慢にして外出されるようになった。そうして到る処で父の自慢話を初められるのを、いつもお供していた私は、子供心に又初まったと思ひ思ひ聞いていた。

但「染め得たり西湖、柳色の衣」という一句は、たしか唐詩選の中に在ると思つてゐるが、まだ調べていない。意味も何もわからないまま、口調がいいのと、父が力を籠めてくり返しくり返し云つていたので、その当時から暗記してゐるだけの事である。

それから私が五六歳の頃になると、父が久しく帰らず、家が貧窮の極に達していたらしい。住吉の堂々たる住宅から、博多いわし鯛町まち、旧株式取引所裏のアバラ屋に移つて、母は軍隊の襯衣縫いシヤツ

や、足袋^{たび}の底刺しで夜の眼も合わさず、お祖母さまと当時十七八であつた父の妹のかおる伯母の二人は押絵^{おしえ}作りにいそしみ、彩^{いろが}紙^みや、チリメンの切屑を机一パイに散らかしていた。押絵の三人一組が二円。軍隊の襯衣^{シャツ}縫いと足袋の底刺しが一日十何銭、米が一升^{しょう}十銭といったような言葉がまだ六歳の私の耳に一種の凄愴味を帯びて泌み込むようになった。一間四方位の大きな穴の明いた屋根の上の満月を、夜着の袖から顔を出してマジマジと見ていた記憶なぞがハッキリと残っている。

父が東京から電報為替で金一円也を送つて来たのもその頃であつたという。

広崎栄太郎という父の旧友が、賭将棋で勝つた金十七銭也を持

つて来て、私の一家の餓^{うえ}を凌^{しの}がしてくれたのもその頃の事であつたと、その後^うに父から聞いた。

その家にどこからともなく帰つて来た父が、私の頭を撫でる間もなく、剃^{かみそり}刀^はを取出してしきりに磨ぎ立て、尻をまくつてアグラを搔^かき^{きんたま}辜丸^{きんたま}の毛を剃り初めたのには驚いた。何でも辜丸^{きんたま}にシラミが湧いたから剃るのだ……といったような話を話していたから、余程、落魄^{らくはく}して帰つて来たものであつたらしい。

「門司の石田屋という宿屋で頭^{とうやま}山と俺とが宿賃が払えずに、故郷を眼の前に見ながらフン詰まっていた。ところで頭山も俺も辜丸^{きんたま}の毛にシラミがウジャウジャしていたから、一つこいつを喧

嘩させて見ようではないか。そうして負けた方がここに滞在して小さくなっている。勝った方が金策に出る事にしようではないかと云うと、頭山が面白い、やってみようと云うた。ところが頭山のヤツは真黒くて精^{せい}悍^{かん}な恰好をしている。俺のに湧いたヤツは真白くてムクムク肥って活動力がないのでドウ見ても勝てそうにない。しかし俺には確信があつたから、新聞紙を四ツに折つて、その溝の十文字の処で選手を闘わせてみると案の定俺の白いヤツが黒い奴を押し倒おして動かせない。そこで俺が解放される事になつて歸つて来た訳だが、ナア二頭山は正直だから、シラミを逃がさないようにシツカリと抓^{つま}んで出すのだから、土俵へ上らない中^{うち}に代表選手が半死半生になっている。これに反して俺の方は、

選手を掴み出す時から出来るだけソーツとてのひら掴んで掌に入れてソーツと下に置くのだから双方の元氣に雲泥の相違がある。勝敗の数は勿論、問題じゃないことになるのだ」

これも事実だかどうか頭山さんに聞いてみない事にはわからないが、その時に家うちじゅう中が引っくり返るほど笑い転げていた事を思い出すと、やはりソナ話をきんたま丸の毛を剃り剃り父が話していたのかも知れぬ。とにかく父が帰ると同時に家中が急に明るく、朗らかになった氣持だけは、今でも忘れない。

なお父が濛々たる関羽髯を剃落したのも、その序ついでではなかったかと思う。

それから父は、家族連中の環視の中で、先祖重代の刀を取出して、その切羽せつばとハバキの金を剥ぎ、鍰つばの中の金象眼きんぞうがんを掘出して白紙に包んだままどこかへ出て行つた。そうして直ぐに帰つて来ようにも思う。ナカナカ帰つて来なかつたようにも思う。

その後の事のちであつたか、その時の事であつたか、父の弟おととの五百枝えと、末弟こまおの林駒生こまおと三人が、家の外に集まつて下水の掃除をしていた姿を思い出す。その中で、どうしても一個所竹竿の通らない処くわを、父が鍬くわで掘出して土管を埋め直し、若い叔父さま二人に水を汲んで来て流して見ろと命じていた。その泥だらけの颯爽さつそうたる姿を、そこいら一面に生えていた、犬蓼いぬたでの花と一いっしょ所に思

い出す。

やはりその頃の事であつたと思う。

父は六歳になつた筆者を背中に乗せて水泳を試み、なか那珂川の洲す口を泳ぎ渡つて向うの石の突堤に取着き、直ぐに引返して又モトの砂浜に上つた。滅多に父の背中に負ぶさつた事なぞない私はタマラなく嬉しかつた。

その父の背中は真白くてヌルヌルと脂あぶらぎ切つていた。その左の肩に一ツと、右の背筋の横へ二ツ並んで、小さな無果花色いちじくの疣いぼが在つた。左の肩へ離れて一ツ在るのが一番大きかつたが、その一つ一つに一本宛ずつ、長い毛がチリチリと曲つて生えているのが大変

に珍らしかったので、陸おかに上ってから繰返し繰返し引っぱった。

「痛いぞ痛いぞ。ウフフフ……」

と父が笑った。

父は九歳の時に遠賀郡おんがの芦屋あしやで、お祖父様の夜網打ちの艫ともろ櫓を押したというから、相当水泳が上手であつたらしい。那珂川の洲口といえ、今でも海水、河水の交会する、三角波の重畳した難コースで、岸の上から見てもゾツとするのに、負ぶさつてゐる私は怖くも何とも感じなかった。すくな些くとも父の肩から上と私の背中だけは水面上に出ていたと思う。

その中うちに私等一家はイヨイヨ貧窮して来て、お祖父様も花鳥風

月を友とする事が出来なくなれたらしい。お祖母様と、モウ七歳になつていた私を連れて二日市に移住し、漢学の塾を開かれた一方に、母は亡弟^{たかし}峻を抱いて市内柳原に住み、相変らず足袋の底と、軍隊の襯衣^{シャツ}に親しんだ。

父は歸つて来る都度に、先ず両親を訪い、次いで母と弟を省みた。

二日市の橋元屋という旅館の裏に住んでいる時、突然に父が歸つて来て、小さな鋳力^{ぶりき}のポンプを呉れた時の嬉しかった事は今でも忘れていない。そのポンプはかなり上等のものだったらしく、長いゴムのホースの尖端の筒先から^{ほとぼし}迸る水が、数間先の土塀を越

えて、通行人を驚かした。父は手ずから金かなだら盥らいに水を入れて二階の板縁に持出し、私と二人でポンプを突いて遊んでくれたが、その中うちに退屈したと見えて、私の顔に筒先を向けては大声で笑い興じた。父と二人でアンナに楽しく遊んだ事は前後に一度もない。

その後のち、同じ二日市で櫛さかき屋の隠宅というのに引越した時に、父が私に羊ようかん糞かぼんを三キレ新聞紙に包んだのをドンゴロス（ズツクの事）の革鞆かぼんから出してくれた。それが新聞を見た初まりで、私が七歳の時であつた。

お祖父様のお仕込みで、小学校入学前に四書の素読そどくが一通り済んでいた私は、その振仮名無しの新聞を平気でスラスラと読んだ。

それをお祖父様の塾生が見て驚いているのを、父が背後から近づいてソーツとのぞいていることがわかったので、私は一層声を張上げて読み初めた。すると父は何と思つたかチエツと一つ舌打ちして遠ざかつて行つた。後で^{あと}お祖母様から聞いたところによると、その時に父はお祖父様にコンナ事を云つたという。

「十歳で神童。二十歳で才子。三十でタダの人とよく申します。直樹（私の旧名）は病身のおかげでアレだけ出来るのですから、なるべく学問から遠ざけて、身体^{からだ}を荒つぽく仕上げて下さい」

これにはお祖父様が不同意であつたらしい。益々力を入れて八歳の時には弘道館述義と、詩^{しき}経^{よう}の一部と、易^{えき}経^{よう}の一部を教えて下すつたものであるが、孝^{こう}経^{きよう}は、どうしたものか教えて

下さらなかった。

とはいえ私は十六七歳になつてから、こうした父の言葉を痛切に感^{かんぱい}佩し、一も体力、二も体力と考えるようになった。さもなければ私は二十四五位で所謂、夭^{ようせつ}折というのをやっていたかも知れない。

因^{ちなみ}に弟^{たかし}の峻は、私が八歳の時に疫^{えきり}痢で死んだ。そのためであつたろう。母は又、私の処に歸つて来て、大きな乳を私に見せびらかすようになった。同時に私等は、宗^{むなかた}像郡神与村^{じんよ}の八^{やつなみ}並から^{はこぎき}宮崎へ移転して来た。

私が九歳の時、お祖父様、お祖母様、母、妹等は宮崎から父に

従つて上京し、麻布の^{こうがいちよう}筈町に住んだ。相当立派な家だつたところを見ると、この頃からポツポツ父の社会的地位が出来かけていたものと見える。

父は京橋の本八丁堀に事務所を構え、ヨシ、ミノという二人の^{しやふ}俵夫が引く二人引の^{くるま}俵で東京市中を馳けまわっていた。^{あごひげ}顎鬚を^{きれい}綺麗に削り、鼻の下の^{ひげ}髭を短かく摘み、白麻の^{つめえりふく}詰襟服で、^{まる}丸火^{ぼや}屋の台ラムプの蔭に座つて、白^{はくせん}扇を使っている姿が眼に浮かぶ。

或る時、お祖父様の前で、地球に手足の生えた漫画を表紙にした雑誌を^{しき}拡げて頻りに説明していた。

「この雑誌は丸々珍聞という悪い雑誌ですが、私の悪口が盛んに掲載されるのでこの頃は皆、茂丸珍聞と呼んでおります。私も大

分有名になりましたよ」

そうした説明に続いて、伊藤、山県、三井、三菱などという名が出ていたのを、私は何故という事なしにシツカリと記憶していた。

その中^{うち}に私の末弟の五郎が生まれると間もなく、お祖父様とお祖母様が東京をお嫌いになつて頻^{しき}りに生れ故郷を恋しがられるので父は閉口したらしく私と三人で九州に別居するように取^{とり}計^{はか}らつた。一時博多の北^{きた}船^{ふね}という処に仮寓^{のち}して後、福岡市の西職人町に借家^{ずまい}住居をした。その時にお祖父様は中風に罹^{かか}られたが、父は度々帰省してお祖父様を見舞い、その都度に、大工を呼んで板塀や窓の模様を変え、右半身の麻痺硬直したお祖父様に適合する

便器を作らせ、又はお祖父様の股間にタムシが出来た時に、色々な薬を配合して手ずから洗って上げたりした。

父が何でも独創でなければ承知しない性格と、後年の建築道楽の癖を、私はこの時から印象して、心から「お父さんはエライ」と思い込んでいた。

三度目に帰省した時に父は鼻の下の髭を剃った。そうしてお祖父様にコンナ事を話した。

「私は社会と共に墮落して行きます。まず第一段の墮落でアゴ髭を剃り、今度の第二段の墮落で鼻の下の髭を剃りました。この次には眉毛を剃って俳優に墮落し、第四の墮落ではクルクル坊主に

なるつもりですが、まあ、そこまで行かずとも世の中は救えましよう。アハハ」

泣き中気のお祖父様は、そんな父の言葉を聞く毎に泣いておられた。

職人町から歴^{れきりんまち}林町に引越した時に、お祖父様は亡くなられた。

発病以来七年目、私が十二の年であつた。中風に肺炎を併発したのが悪かつたのであつたが、お祖父様が無くなされると直ぐに父は茶を命じて一同を落ち付かせ、お祖父様の清廉潔白の生涯について批評めいた感想を述べ初めたので、皆、シンとなつて傾聴していた。私は永年可愛がつて下さつたお祖父様がイヨイヨホント

ウに死なれたのかと思うと泣いても泣いても泣き切れない位、悲しかったので、父が何を話していたか殆んど聞いていなかった。

お祖父様のお葬式が済むと間もなく母は妹と、弟を連れて九州に下り、福岡通とおりまち町に住み、祖母と私もそこへ同居し、中学へ通うようになった。

中学に通い初めると間もなく私は宗教、文学、音楽、美術の研究に凝り、テニスに夢中になった。明らかに当時のモボ兼、文学青年となつてしまった。

その十六歳の時、久し振りに帰省した父から将来の目的を問われて、

「私は文学で立ちたいと思います」

と答えた時の父の不愉快そうな顔を今でも忘れない。あんまりイヤな顔をして黙っていたので私はタマラなくなつて、

「そんなら美術家になります」

と云つたら父がイヨイヨ不愉快な顔になつて私の顔をジイツと見たのでこつちもイヨイヨたまらなくなつてしまった。

「そんなら身体からだを丈夫にするために農業をやります」

と云つたら父の顔が忽ち解けて、見る見るニコニコと笑い出したので、私はホツとしたものであつた。

「フン。農業なら賛成する。何故かというと貴様は現在、神経過敏さつきの固まりみたよになつてゐる。先刻から俺の顔色を見て、ヤ

タラに目的を変更しているようであるが、そんなダラシのない神経過敏では、今の生存競争の世の中に当って勝てるものでない。

芸術とか、宗教とかいうものは神経過敏のオモチャみたようなもので、そんなものに熱中するとイヨイヨ神経過敏になって、人間万事が腹が立ったり、悲しくなったりするものだ。その神経過敏は農業でもやって身体を壮健にすれば自から解消するものだ。だから万事はその上で考えて見る事にせよ。現在の日本は露西亞に取られようとしている。日本が亡びたら文学も絵もあつたものでない。そのサ中に早く帰って頂戴なナンテ呑気な事が云つておられるか。雪舟の虎の絵を見せても、露西亞兵は退却しやしないぞ」といったような事を長々と訓戒してくれた。

私は父の熱誠に圧伏されながらも、生涯の楽しみを奪われた悲しさに涙をポトポトと落しながら聞いていた。

その訓戒が済んでから茶を一パイ飲むと父は私を連れて裏庭に出て自分で指しながら、木立の枝を私に卸させた。私が筋肉薄弱で鎌が切れず、持て余しているのを見た父は、自分で鎌と鉋を揮^{なたふる}つて、薪の束を作り初めたが、その上手なのに驚いてしまった。

カチカチ山の狸と兎が背負っているような、恰好のいい蒔の束が、見る間に幾個も幾個も出来たのを、土蔵の背後に高々と積上げた。出入りの百姓で父の幼少時代を知っている老人が、父の野良仕事の上手なのを賞めていたのは決して作り事でもオベツ力でもない

事を知った。

多分、父は早速私に農業の实地教育をしたつもりであつたろう。

十九の時に私は母親に無断で上京して、お祖母様と母親を何故九州に放置しておくか……という事に付いて、猛烈に父に喰つてかかった。すると最後まで黙つて聞いていた父はニンガリと笑つて云つた。

「ウム。貴様の神経過敏はまだ治癒なおらぬと見えるな。よし、それでは今から俺が直接に教育してやろう。母さんも東京へ呼んでやろう……」

私は三拝九拝して又涙を流した。

「それには先ず中学を卒業して来い。現在の社会で成功するのに中学以上の学力は要らぬ。それから軍隊へ這入れ。どこでもええから貴様の好きな聯隊に入れてやる」

中学を出て福岡の市役所に出頭し、徴兵検査を早く受けたいと願ったら、吏員から五月蠅うるさがられたので、母等と共に上京して鎌倉に居住し、麻布聯隊区に籍を移し、たしか乙種で不合格となつたのを志願して無理にパスした。身長五尺五寸六分、体量十三貫がんに足りなかった。こうした私の入営に対する熱意を父母は非常に喜んでくれた。

明治四十一年兵として近衛歩兵第一聯隊に配属された私は、極度の過労と、慣れない空気のために見る見る弱り果てて、とうとう第一期の検閲直前に肺炎で入院した。その四十度の高熱の中に、その頃の最新流行の鼠色の舶来中折なかおれを冠って見舞に來た父の嚴肅そのもののような顔を見て、私はもう死ぬのかなと思つた。

「貴様が死なずに少尉になつて歸つて來たら、この帽子を遣る」と父は云つた。私は病床でその帽子を冠つて、ちようどいいかどうかを試みながら、是非なおつて見せる……この帽子を冠らずには措おかぬと心に誓つた。

「直樹（私の旧名）の奴は俺の子供だけにダイブ變っている。死にかかつていても、油断のならぬところがある」

とその直後に母に語った……と母から聞いた時、私は息苦しい程赤面させられた。

軍隊を出ると体力に自信が出来たので九州に下って地所を買い（現在の香椎村）果樹園を営んだ。その時にも私が思わず赤面するような事を他人に語ったそうである。

「彼奴は全く油断のならぬ奴だ。^{あいつ} 抵当に這入っている地面を無代働いたようにタタキ落して買うような腕前をいつの間に養ってやったか知らん。おまけにアイツは地面の代金が余ったと云って五百円の札束を知らん顔をして俺に返したが、ナアニまだ五百円か千円ぐらい暖めている奴だ。アイツはタダの正直者じゃない」

全く以てその通りであつた。

その後度々上京したが、時々思い出したようにコンナ事を云つた。^{のち}

「俺が今死んだら貴様はドウするか、他人の厄介にならずに葬式が出来るか」

この言葉は平生、父が口癖のように云っている「子孫のために美田を買わず」という言葉と明らかに矛盾していたが、私はドチラも父の真情である事を知っていたので、わざと冷笑していた。

「俺のような人間になるな」という事もよく云ったものであるが、これも父の或る悲しい、淋しい心理の一角を露出した言葉と察し

て、^{つつし}謹んで、うなだれていた。

その都度^{つど}に私は母に説いて「お父さんが亡くなられたら私は簡単に火葬にして、お母さんや妹と一緒に三等車で九州へ引上げて、極く手軽い葬式をするつもりです。いいですか」と念を押していた。母はいつも涙ながらニコニコしてうなずいていた。

今年の七月十七日、香椎の球場で西部高専野球の予選を見ている中に、^{うち}雇^{やといにん}人の小母さん^{おば}が泣きながら電報を持って走って来た。

「チチノウイツケツスクコイ」

私は一^{いつしよ}所に見物していた中学生の子供二人と一所にタクシーで家に帰り、妻に金の準備を命じ、そのままの服装で、ポケット

四書と丘浅次郎氏の進化論講話を携えて又もタクシーに飛乗り全速力で博多駅に駆けつけ、富士にのりおく乗後れてサクラに間に合った。

途中小郡で東京に病状を問合わせ、糸崎で返電を受取った。

「ジウタイノママジゾクセリ」

私は直ぐに持久戦を覚悟した。中風で重態のまま三箇月も持続した例を知っていたから……。

それからグツスリと眠った。不思議なほど安眠した。そうして姫路で眼がさめた。それから先の一日の永かったこと。

東京駅に着いて父が意識不明の病状をハッキリ聞いた時に初めてガツカリした。そうして、そのままの心理状態を今日まで持続

している。

翌朝、七月十九日の午前十時二十二分に三年町の自宅自室で父が七十二歳の息を引取った時、私は脱脂綿を巻いた箸と、水を容れたコップの盆を両手に支えて、枕頭に集まっていた数十名の人々に捧げ、父の唇を濡らしてもらったが、私は金城鉄壁泣かないつもりで、故意に冷然と構えていた。この際、つまらない顔をして見せるのは、他人様の迷惑であるとさえ考えていた。

ところが、その綿を巻いた箸に手を出す人々の指が皆わなないて箸を取り得なかった。もちろん一人残らず顔を引ひき歪ゆがめていた。その顔があとからあとから引続いて来て、ギクギクと声を立てな

がら父の顔に手を合わせて行く姿を見送っているうちに、次第次第に私の手がわなないて来た。

私の背後には昨夜から父の最後の喘ぎを一心に凝視して御座った羽織袴の頭山さんが、キチント椅子に腰かけて、両手を膝に置いて御座るので、醜体を演じてはならぬと一生懸命に唇を噛んでいたがトテモ我慢し切れなかった。

もちろん母や妹、看護婦なぞいう女共が泣くのは何ともなかったが、男の人達が一々唇をわななかし、咽喉をヒクヒクさせて行かれるのが一々胸にコタエた。最後に、色の黒い若い、田舎の百姓さんが、泣き濡れた顔を私の真正面に持つて来て思い切り引き歪めて見せた時には、全く何もかもわからなくなってしまった。

今にもコップとお盆を投出そうかと思ひ思ひ我慢し通した。

それから間もなく、父の友人で、永い間、私等の家族の世話を
して下さった人々が協議された結果、私を別室に招いて次のよう
な事を云われた。

「貴方のお父さんは貴方個人のお父さんと思つてはいけないと思
います。吾々のお父さんであると同時に社会のお父さん……すな
わち公人であると思います。だからこの際、相済みませぬが、貴
方の個人としての弔意を捨てて、吾々に葬式をさせて頂けますま
いか」

そうした誠意に満ち満ちた言葉は、何もわからぬ程、色々の思

い出に混乱していた私の頭を北極の氷のような冷静さに返らせた。そうして一切の覚悟をきめた私は即座にありがたくお受けをした。直ぐに母の前に走って行って頭を下げながら、私の専断の許しを請うと、母は涙に暮れながら、私の手をシツカリと握って云った。「モウ、これからは何もかもアンタの思い通りにしなさい」

それから混雑の中を押し分け押し分け妹いもうとむこ、婿むこや、養子達に一つ々々、この事を報告してまわった。皆、泣いて頭を下げた。その泣顔と、お辞儀の交換の中に私はダンダンと、そこいら中が明るくなつて来るように思った。万事が、一直線に片付いて行きそうな確信が出来た。

間もなく郷里の福岡で玄洋社葬にしたいという電報が来たから、

これも独断で拝承して後^{のち}に一同に報告した。

父は生前、死体の全部を大学に寄附する旨を大勢の人に云つていたので、母が情なさそうな顔をするのを押し切つて、その通りに決行した。その前に父のデスマスクを斎藤という人が取つて下すつたが、そのデスマスクを取る直前の父の顔は実に満足そうな……生前に見たドノ顔よりも気高い、懐しい微笑を含んでいた。さてはこれが父のホントウの顔であつたかナと思うと、又タマラなくなりそうになつたので慌てて湯殿に行つて顔を洗つた。

葬式は増上寺で盛大に行われた。色々、大勢の人々がやって来て告別の焼香をして下すつたが、その中に古びたカンカン帽、素

足に駒下駄、浴衣がけにステッキ一本の書生さんが、アツサリと焼香し、叮嚀に叩頭こうとうして行つたのを、参列の人々の中で喜んでいる人が相当あつた。

「アイツは愉快的な奴だ。故人はアンナ調子の人間が一番好きだったからね。あの気軽く焼香に来てくれた心意気が嬉しいじゃないか」

「一層の事、告別式をどこかの野ツ原に持出して、野人葬とすればよかったかも知れないね。野辺送りという位だから……ハハハ」

悔くやみじょう状は一々私が開封して眼を通したが、やはり愉快的なのが混つていた。

「私は近所の爺さんから頼まれて杉山さんの霊前にこの和歌を捧げてくれという事ですから、この手紙を上げます。私は杉山という人がドンな人だか、よく知りませんが謹んでお悔みを申し上げます」

といったような朗らかなのや、お悔みのつもりであろう、

「杉山先生が亡くなられても、君に忠義という事は決して忘れません」

と簡単に楷書して泣かせるのや、

「先生は私にとって実の親よりも有難い人でした。どうぞ今後も、お父さんに代って私を可愛がって下さい」

といった、いじらしい意味の長文や、

「新聞で見てビックリしました。香こうでん奠十円送ります」

という奇特な方や、色々であったが、一番痛快でタタキ付けられたのは敬弔の文字を印刷したカードを二銭の開封にして来た一通であった。この人は日本国中を皆殺しにするつもりで、こんなカードをフンダンに印刷して用意しているのじゃないか知らんと思つて茫然となつた。

九州で玄洋社葬をして頂くために、東京駅を出発したのは八月二十八日であつた。

駅頭まで見送りに来た頭山満先生が、父の遺骨を安置した車の前に立ちながら、見栄も何も構わずに涙をダクダクと流してい

れるのを見た時に、私は顔を上げ得なかった。

広田弘毅閣下も泣いておられたそうであるが、これは気付かなかった。

「頭山さんが頭山さんが」

と云つて、今年六十七になる母親が、国府津こうづ附近まで泣き止まなかったのには全く閉口した。慰める言葉が無かった。

父が生前に社会の父であつたかドウか私は知らない。けれども生前の父をこれ程までに思つて、葬式までして下すつた世間の方々が、今からは疑いもなく私の父の死後の父になつて下すつた訳である。

あらゆる意味に於て不肖^{ふしよう}の子である私は、父の生前に思わしい孝行を尽し得なかった。これから父の死後の父に、心の限り孝行をして行きたい。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集Ⅱ」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年12月3日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：小林徹

2001年12月5日公開

2006年3月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

父杉山茂丸を語る

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>